

## 四万十川橋

しまんとかわばし

土佐中村は、高知県西南部・幡多地方の中心の町である。町は四万十川と後川に沿い、そのむかし応仁の乱をさけて下向した関白一条教房が、京都を模して町造りをしたといわれる美しい静かなたたずまいの町であった。

戦争は自然にまで影響を及ぼすのであろうか。敗戦の日本を襲ったのは、台風・洪水そして大地震であった。昭和21年（1946）12月21日4時30分ごろに発生した南海大地震は、マグニチュード8.1、わが国有史以来の大地震のひとつであり、西日本とくに四国南部を中心に大被害をひきおこした。なかでも中村の町は、全戸ほとんどが破壊、死者273名、負傷者3358名の犠牲者をだした。

中村からさらに西の町々である宿毛・土佐清水・足摺へは、四万十川橋をわたって行かなければならない。地震はこの橋にも被害を与えた。後で延長された鉄筋コンクリート橋には被害はなかったが、地震によって当初からの8連のトラス橋のうち両端を残して6連のトラス橋区間が被災した（図参照）。

被災後の状況から、トラスの可動端が橋脚からすべり落ちて反対側の固定端の橋脚を引きつけ、そのため次のトラスの可動端がすべり落ち、将棋倒しのように続いた、と推定された。またトラスが落ちるときに、上部工の大重量が橋脚をも破壊した。こうした現象は、後の福井地震、二ツ井地震でも同じように起きている。

四万十川橋は、とりあえず仮橋をかけて地震後の交通に対処し、落下した6連のトラスのうち4連は補修して再架設し、損傷の大きかった2連のみを新しくつくった。復旧は1年半後になって、ようやく終えた。

もしトラスが墜落しなければ、重いトラックは無理にしても、人だけなら十分通れたであろう。地震の緊急時、この意味は大きい。落ちさえしなければ、桁・トラスそして橋脚の損傷は、ずっと小さかったであろう。

これらの教訓から今では、耐震連結装置が橋桁と橋桁の端部をつなぎ、地震時に少なくとも橋桁が落ちないようにつくられている。

復旧した四万十川橋は県道から国道に、そして現在は再び県道にもどって人びとをわたし続けている。

四万十川の流れは清らかである。毎年11月末、漁業組合の解禁日がくると、中村の町なかの人びとは一斉に赤い四万十川橋の上手の清流に入って落鮎を網ですくう。とくに収獲の多い最初の2～3日は老若男女、非常な人出である。その楽しい行事は今もつづいている。

〔F I〕

竣工年月：大正15年（1926）6月30日

所在地：高知県中村市

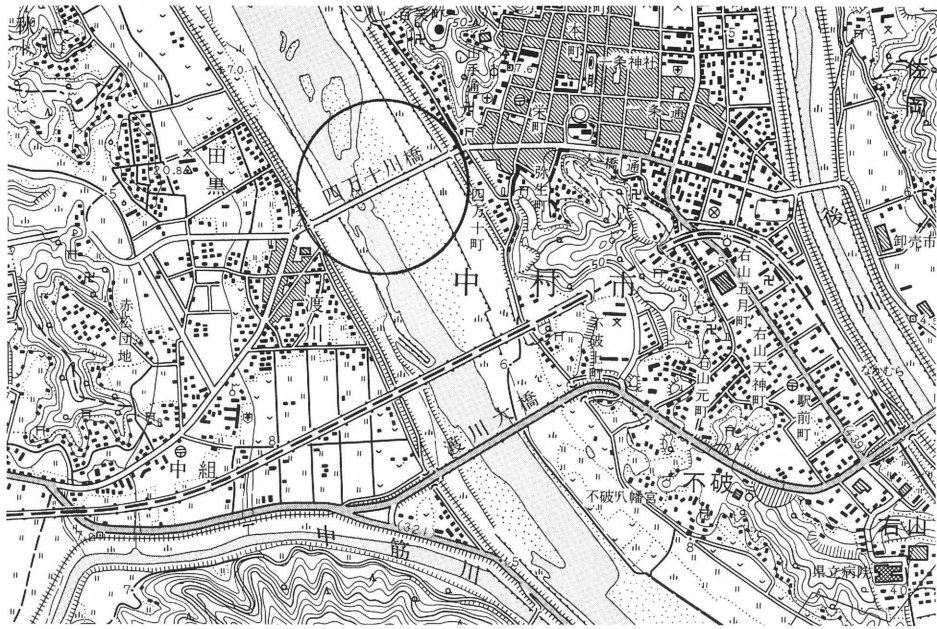
河川名：四万十川

橋長・幅員：507.2m×5.5m

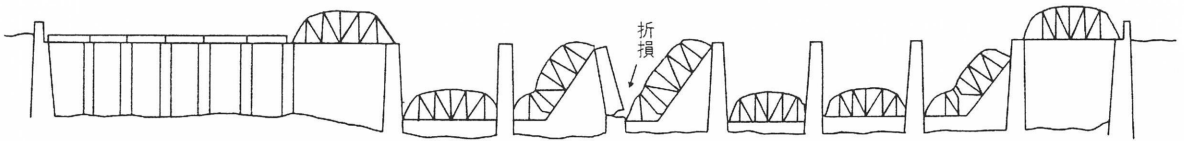
径間数・支間長：①8×53.645m、②6×11m

形式：①下路曲弦ワーレントラス、②鉄筋コンクリート桁

備考：昭和43年歩道添加（幅2m）



(1:25,000 土佐中村)



〈1994年4月，撮影・小浜淑人〉